

辛いときほど身に染みる

校長 桑島 宏明

昨年の十一月も終わろうとしていたとある日、出先からの帰宅途中、J Rの駅前で転倒してしまい右肘を骨折してしまった。折しもその日はこの冬一番の冷え込みで、駅前交差点はツルツル状態であり、その状況を把握しきれなかった予見の甘さと、バランスを崩しかけたときに耐えるための体幹が還暦の前に大分弱っていることを痛感させられる出来事であった。手術は無事終わり、元の曲げ伸ばしができるようにハビリテーションを行った。

入院、手術、その後の勤務と、右手が使えないことによる不自由さの中、様々な方々に助けていただいて何とか毎日を乗り切っている。さてこの稿では、事故に於いて感謝してもし切れないお二人について記す。

転倒後、自分の右腕の状態が尋常ではないことが直ぐ分かる。交差点から歩道に這い上がるまでの記憶はあるのだが、痛みと、ショックのせいか、一瞬気を失ってしまった。次に気が付いたのは「大丈夫ですか？ 分かりますか？」という女性の呼びかけであった。何とその方は、滝川でお勤めの看護師さんであった。転倒の仕方とその後の行動で異変に気が付きすぐに近寄り介抱にあたっていたのだ。たまたま札幌の実家に帰省した時に私の事故に遭遇したとのことであった。その後も意識が戻った私から、家族の連絡先を聞き出し電話をかけてくれたり、夜間救急病院を直ぐに調べてくれたりと、迎えに来た家族が困らないように完璧な段取りを整えてくれた。その間も、痛がっている私に対する励ましの声かけを間断なく行ってくれた。

手術後、曲がって固定されてしまった肘を伸ばすリハビリテーションを担当してくれたのは三十代前半の理学療法士である。骨格や、筋肉など身体のしくみに対する知識は大

変豊富で、その作業の目的を明確に説明しながら治療を行うので、患者側は治療への不安なくリハビリを受けることができる。毎回のリハビリは苦痛を伴うものであるが、それを少しでも紛らわそうと、治療への道筋を、時には冗談を交えながら優しく話してくれる。肘の痛みもさることながら、「本当に治るのだろうか」という私の心の不安を取り除くかのように励まし、希望を与えてくれる。このコミュニケーションの力には感服した。

人間、けがや病気をすると本当に心細く不安に苛まれる。元気な時には全く気付かないものだ。しかし、元気な時ほど「困り感を抱えている」人の存在に心を配らねばという考えに至ることができた。この医療人お二人のおかげである。周囲へのアンテナを張りながら、心配り、目配りができる人になりたい。人間として、優しさの本質を改めて学ばせていただいた出来事であった。